The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	櫻井義秀・川又俊則編『人口減少社会と寺院ーソーシャル・キャピタルの視座から』（法蔵館、2016年）書評会報告 ： 評者のコメントと論点、若干のリプライを中心に
Author(s)	冬月, 律
Citation	宗教と社会貢献. 2017, 7(2), p. 31-37
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/65069
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評会報告

櫻井義秀・川又俊則編『人口減少社会と寺院―ソーシャル・キャピタルの視座から』（法蔵館、2016 年）書評会報告

―評者のコメントと論点、若干のリプライを中心に―

冬月　律*
FUYUTSUKI Ritsu

1. はじめに

本報告では、國學院大學にて開催された、2016 年度第 1 回「宗教と社会貢献」研究会で企画された書評会について報告する。まず、書評会に出席していただき、書評に労をとってくださった評者の皆様に感謝申し上げます。書評会は、関西学院大学准教授の白波瀬達也氏の司会により進められた。評者は浄土宗総合研究所／淑徳大学の名和清隆氏と大正大学大学院の福井敬氏、そして筑波大学大学院の問芝志保氏の 3 名が担当。最初に編者である櫻井義秀氏が本書の趣旨および課題について述べられ、引き続き 3 名の評者がそれぞれ書評コメントを行った。その後、研究会に参加した編者の櫻井義秀氏・川又俊則氏をはじめ、一部の執筆者（冬月律氏・大谷栄一氏）からのリプライがあり、最後にフロアとの間で質疑応答がなされた。以下では評者ごとに分けて、各評者が取り上げた論文の論点を中心に報告していくが、論点の指摘は、評者作成によるレジュメの要点をまとめる形で紹介したい。

2. 寺院・宗派の置かれた状況と取り組みにかかわるもの

書評会の前に、本書の編者から執筆目的と概要が紹介された。まず櫻井義秀氏からは「社会学の立場ではマクロ、メゾ、ミクロの構成段階にする傾向にある」とし、「地域性が異なることを考えなければならないことが重要」であること指摘した。そして、本書の執筆者は各事例から、ソーシャル・キャピタルの概念を用いながら、宗教（教団）とのかかわりについて考察しており、研究手法としてもそれが通常であると述べた。また、後で

* 公益財団法人モラロジー研究所研究センター・専任研究員・rfuyutsu@moralogy.jp

述べるが、従前の宗教とソーシャル・キャピタルにかかわる研究では、実践活動において教団側が抱える負担の側面に対しても、「どれだけの人が耐えうるのか、といった現実的な課題も浮き彫りにすることができた」と述べた（第 4、13 章）。それを含め、寺院仏教が抱える本当の問題として祖先祭祀・家族による祭祀の継承、寺檀制度の崩壊または衰退を挙げた。ほかにも、生き残りをかけた激しい競争に寺院は直面しており、今後はそういった「サバイバルを超えたところでの議論も必要」であるとするも、「議論が拡散してしまうことには注意が必要」であると述べた。一方で、川又俊則氏も、「誰のために存在する寺なのか」については、今後もっと重要な問題になってくるとして、兼務寺院・神社などのほかにも、講についても全滅の危機があることを指摘し、それらの問題についてさらなる経過観察が必要であると述べた。

上記のような編者による本書の目的と課題のあと、最初に行われた名和氏の報告では、全 14 章からなる論文のうち、主に寺院あるいは宗派がどのような課題に直面し、いかに乗り越えようとしているか、を記述分析している第 2 章、第 4 章、第 7 章、第 10 章に焦点を当てている。まず過疎問題を日本の伝統宗教ではどのように認識し対応してきたかを、過去 30 年間の宗教専門誌から把握した第 2 章を取り上げた。論点として、これまでの対策のうち、教団や研究者による事例報告の問題もあるのではないか。つまり、教団の調査や個別事例の報告は増えてきたものの、その内容には負の側面が（あえて）報じられていない。それが、教団と現場との認識共有の妨げになっており、現状把握と現実の差が埋まらない限り、教団の抜本的な対策構築も難しいという。

これについて、筆者のリプライとして、5 段階の過疎対策が行われる（一部並列する形として）なか、教団によっては個別事例報告がなされている。これは神社界でも仏教界でも共通するものであると思うが、いずれも負の側面を（あえて？）表に出していないことが現場の宗教者に伝わりにくい要因になっているのではないかとし、もっと現実的な視点を入れるべきであると述べた。また、大規模の宗教団体による調査は、教団全体を把握するためには非常に有益であるが、個別調査がなされていないため、事情は分かるものの、学問的には答えられていない。反対に、個別調査ではそれぞれの事例によって詳細は分かるが、サンプルが少なく、普遍性をもった

分析は困難である。いずれにせよ、内実を究明しない限り、本当の問題は見えてこないし、有効な対策を講じることもできないとして、評者の指摘に共感するとともに、これからの実態調査は、従来の教団単位で行われているもののほかに、教団と個別調査を行う研究者との協働による調査を加えることで、より現実的な課題が浮き彫りにされる可能性が高まると述べた。

続いて、浄土真宗本願寺派の「第 9 回宗勢基本調査」の実態報告と、寺院と地域社会のソーシャル・キャピタルを事例研究から検証した第 4 章を取り上げた。論点は以下の 3 点にまとめられ、現代の寺院はまさに「生かさず殺さず」の現状にあることが指摘された。①「寺院の見える化」によってプライバシーが補償されない、とくに若い住職の嫁がその状況に耐えられるか。②住職が寺のほかに兼職をもつことによって様々なネットワークを持ち、それが寺院活動に反映され、地域活動に活かされるとする正の側面は確かに言える。その一方で、それらのネットワークとつながりによってもたらされる負の側面、つまり住職への責任が大きくなるといったこともあるのではないか。③普段は遠方の都市部で仕事・生活し、体力的に厳しくなってはじめて地元に帰ってきて寺を継ぐというパターンも多くみられる事実もあるのではないか。

次に取り上げた第 7 章論文は、曹洞宗による「宗勢調査 2005」と「檀信徒意識調査 2005」から教団の現状を報告し、檀信徒の宗教行動と意識を明らかにした。その論点は、①檀家の宗教的ニーズが、「祖先供養」であることは、調査の結果から明らかになっているが、教団側ではそれをサービスとして捉えるのか、それとも宗教行為として捉えるのか、②寺院の場合、檀信徒のつながりは葬儀や年回法要によって護持されるが、そのほかに、そういった祖先供養によって檀信徒側の血縁の結びつきも維持されるといった機能は考えられないだろうか、の 2 点にまとめられた。

最後に取り上げた第 10 章は、北海道における過疎地寺院の現状と将来への展望を具体的に記述し、寺院とはどのような存在であるのかを浮かび上がらせた。その論点のうち、筆者による「日本の仏教寺院がなくなるということが、なぜ学校やスーパーマーケット、コンビニの閉鎖とは異なる、別次元の崩壊感として意識化されるのかを検討すべき」（本書 304 頁）とする指摘は、「なぜ神社がなくなると問題なのか」と共通する視点ではな

いだろうか。

以上のように、名和氏は 4 論文の個別指摘を踏まえた上で、これらの論文に共通する点を以下の 3 点にまとめている。

①「寺院とは誰、何のためなのかという物差しの違い」

寺院側にとっての寺院は、まさに「布教の拠点」と「僧侶の生活の糧・拠点」である。しかし、檀信徒・地元住民にとっての寺院は、「祖先供養・墓」「祈りの対象がある場所」「地域活動の場」「地域の歴史性・シンボル」などである。この両者の寺院に対する認識（意識）の違いをどう理解するか。

②「寺院が「消滅」することの意味」

一般的に寺院消滅といえば、「住職がいなくなること（兼務化）」「兼務する住職もいなくなり、無住職化すること」「寺を会所とした信仰共同体が消滅すること」「信仰の対象物（仏）を祀る建築物が消滅すること（墓は残っている場合もある）」「他寺院と合併すること（土地・建物の所有名義は変わるが存続する）」「宗教法人を解散するということ」などが挙げられる。しかし、実際は「（寺院が）消えるのか」それとも「（寺院を）消すのか」といった「消滅を決断する基準」（主体の違い）が異なってくる点で、複雑な問題を含んでいることに注意が必要である。

③ソーシャル・キャピタルと寺院

「ソーシャル・キャピタル」という概念から見た寺院と、現場の寺院の実態から考える「ソーシャル・キャピタル」から見える風景は異なる。

3. 地域社会における寺院の取り組みにかかわるもの

福井氏の報告では、地域社会における寺院の取り組みをより具体的に論じる事例研究である第 4 章、第 8 章、第 12 章に焦点を当てている。

まず、最初に取り上げた論文は、名和氏と同様の第 4 章であったため、論点だけを挙げると、筆者が論文で、独自の護持システムとして紹介している地域における寺の「年番制」は、多くの真宗本願寺派では特定の地域に限らず、真宗本願寺派独自のシステムではないだろうか、とした。

次に取り上げた第 8 章に対して評者は、「浄土宗滋賀教区所属の全寺院を対象に行った調査を用いて、日常的な法要・行事、教化活動と、寺院と檀

家との紐帯の程度に関連性があることを明らかにしたことから、そうした寺院と檀信徒の紐帯が寺院の日常生活によって支えられている」点に注目した。それについて、筆者のリプライとして、「地域社会に寺院があること（Being）を知らせ、何をしているのか（Doing）を探ることを念頭においている。地域内において、活動の取り組みに温度差があることを確認でき、地域性、個別性がもつ範囲は意外と非常に複雑であることを知るべきである」と述べた。さらに、研究のトレンドにコミットした研究と従来の研究において、「とくにソーシャル・キャピタルについては、質的調査は一定数あるが、量的調査が少ない。調査もしてみたが、測定が難しい」といった測定方法についてもさらなる議論が必要であることを述べた。

本書評会の最後の問芝報告では、宗教講や廃寺、坊守などといったより具体的な事例を取り上げた、第 9 章、第 11 章、第 13 章が対象となった。まず第 9 章の論点として、「門徒の主体性に加え、寺院も重要な役割を担う講について七里講を事例に挙げて分析するなかで、筆者が述べた講の維持に必要な居住地条件（問題）のほかに、他の行事の復活の必要性についてはどうか」を挙げた。つまり、一般的な講の社会的意義として挙げられる、経済・人的相互扶助や娯楽の提供、親睦を深めるなどといった、祭礼や娯楽的要素が七里講にあるのか、とした。また、第 11 章の論点は、①寺院が地域社会のソーシャル・キャピタルとして機能することから、寺院の果たし得る役割があったとしても、寺院経営の存続は別問題として存在していると思う、②「尊厳ある終焉」の責任について宗派ではどのように考えているのか、の 2 点にまとめられた。他方、書評会の冒頭でも触れられたように、第 13 章の論文は、既存のソーシャル・キャピタルの負の側面やその維持の困難を浮き彫りにし、とくにジェンダー役割を負わされた坊守の存在に目を向ける必要性を提言している。そうした坊守に焦点を当てて彼女らの社会参加がコミュニティに有効に作用していることを明らかにしたとする筆者自身の評価に対し、評者からは「住職・坊守からの聞き取りだけで判断できるか」「地域住民の聞き取りによる補足が必要ではないか」といった疑問点が示された。

4. 全体討論

以上、3 名の評者によるコメントと、一部の筆者からのリプライを経て、全体討論がなされた。その内容は以下の通りである。

まず、黒崎浩行氏からは、宗教者が主体となる、信徒門徒なる信者側のレベルの違いを考えると、地域社会に起きた過疎という問題を、宗教の中で答えを探ることへの疑問が示された。社会の問題と同時に、檀信徒組織が個別化、弱体化することに対して、たとえば第 4 章（那須論文）において独自の年番制の事例は、もともとそういうものであって現在も存在し、神社界においても存在する。また、氏子は寄付を募れるが、地域住民には募りにくい。地域社会との信仰集団との間に生じる問題をどう考えるか、それらはここ数十年の間に起きたものなのか、それとも昔からあるのか、その理解はどのようにすればよいのか、といった質問があった。それに対し、櫻井義秀氏は、地域ごとの差はあるだろうが、過疎地域でも寺院規模は異なる。地域が衰退しても寺院は生き残るところもある。地域内の宗派の違いについても、隣寺が同宗派であるとは限らない。安価な護持会、葬儀の安さなどで選ばれる時代となってきたことを考えると、あまり典型的に捉えることは難しいのではないか。見えてこないところもあり、マクロ的な観点での記述は危険を感じると述べた。

さらに、藤本頼生氏より、書評会で触れた内容については「（宗教法人の）消滅のことを考えたときに、制度の視点からすれば、解散したくても解散できない現状がある。また、社会面、制度面からのアプローチが手薄であると思うし、法治国家であることを考えると、解散が難しくなっているのは制度の問題にほかならない。それゆえ、合併とか解散などができない理由にこのような根っこのところ、本音たるところを研究しなければならない。それを阻害するものが制度であり、仏教も神道もそれは同じであると考える」と述べた。さらに、参考として神社界で初めて悉皆調査が行われたことを取り上げた。調査結果を見る限りでは、限界集落の中でも元気なところがあり、神社界に対して石井研士の指摘するような危機感はそれほど感じないとし、その理由についても今後検討しなければならないと付け加えた。

また、フロアからは「終活」という響きに個人差があることに関連して、

「現実的にどのような形で亡くなっているのかの類型化は可能か」「マクロ視点からみて、（尊厳死たる）閉じ方は、ある程度の戦略の観点からみてどのようなものが考えられるのか」といった質問があった。それに対して名和清隆氏は「浄土宗の立場からいえば、（寺院）数が減ることへの抵抗感、面倒、といったことから戦略・対応までは踏み込めていない。宗としての対応、教団としての対応もあるが、とりあえずは、（長期の）不活動法人の整理、対象に当たっているのが現状である」と述べた。質問に対する直接回答ではなかったが、教団による問題対策への厳しい現実がうかがえた。

このように、書評会においては、本書の各章の論考から明らかにされた課題の現状と取り組みのほかにも、評者やフロアから質問や問題提起がなされた。また、人口減少社会における寺院を含む宗教団体については、経過観察を続けることはもちろん、新たな課題に対する調査も必要であることが再確認できた。

最後に、評者の名和清隆先生と福井敬先生、問芝志保先生、そして編者の櫻井義秀先生、川又俊則先生を含め参加された皆様に再度感謝を申し上げ、このような機会を提供してくれた「宗教と社会貢献」研究会にも御礼申し上げます。

参考文献

稲場圭信・櫻井義秀編 2009 『社会貢献する宗教』世界思想社。

櫻井義秀・川又俊則編 2016 『人口減少社会と寺院―ソーシャル・キャピタルの視座から』法蔵館。